

Title	巻頭言 大学の使命：一律秋入学論争と中教審答申の問題性を受け止める
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.53, 2012.3 : 3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4230
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

巻頭言 大学の使命

—— 一律秋入学論争と中教審答申の問題性を受け止める ——

聖学院大学総合研究所副所長
聖学院大学学長
阿久戸 光晴

現在、東京大学の発信を嚆矢とする大学の一律秋入学提案と中教審（代表的私学の指導者が座長を務められる）答申に盛り込まれた大学生の予習復習時間のチェックの義務化提言（これに助成金の報償的多寡を絡ませようとする文科省の動きが加わる）などが、日本社会に対してかまびすしい議論を呼び起こしている。いったいこれらの論議の背景にあるものは何か。

はじめの一律秋入学提案は、国内外の留学促進を目指した教育研究グローバル化と、日本の高校までの卒業月が変わらないことを前提とする「ギャップ・タイム」の高校卒業生の活用奨励を軸としているように思われる。しかし本学はすでに二〇年近く前に、海外の大学との教育・研究交流促進のため、通年制からセメスター制への変革と年二回の卒・入学式を実施してきた。それは、学びの期間の一律化を避けて学ぶ者の選択の幅を広げることを目指したものであり、今般の一律秋入学提言の趣旨とは似て非なるものである。自動車の右側通行が大多数の世界標準になっているからと言って、英国

などと同様にユーラシア大陸に陸続きとなっていない日本が強引に右側通行へ変えたとして、グローバル化に寄与するか。事故を増やすだけではないだろうか。ちなみに、海外の多くの国の学期開始時期が秋に始まる背景に教会暦があることや、日本社会において春学期に収斂して行った背景に稲作時期をにらんだ会計年度に合致させる背景があったこと（各国で会計年度と学期年度には連動性がある）などは、ここでは論評を差し控える。しかし一律秋入学を強行する場合には、調整検討されるべきあまりに多くの難問が控えていることを指摘したい。

また「ギャップ・ターム」の使い道の一環で高校生に自由選択権を与えると称して、半年の六カ月の語学留学や被災地などへのボランティア活動の教育的意義が大きいと尝试してみたとして、実効性があるであろうか。海外にはさまざまな教育サービスを持つだけの語学校がある。またボランティア組織でも高校生に危険な労働を課す信頼のおけない団体もある。やはり保証できる機関に身を寄せなくては、教育的プログラムとして問題であろう（いったんそれぞれの大学に入学して、その大学に関係のある海外の語学校での学びやボランティア機関での奉仕が実のある体験となろう。その間の授業料の減免なども意味を持つ）。

今回の国立大学側の提言の狙いは、またしても世界の大学の順位において日本の各大学が「名譽ある地位を占める」挑戦にあると言われる。しかしそれだけではなからう。その狙いに、しばしば大学改革の障害となりうる教授会構成員の主張を相対化しつつ教育論議をするために、グローバルな舞台設定をしようとしたことも加えられると見られる。しかし仮にそうだとしても、やはりその最大の影響を受けるのは高校生・大学生である。大学の制度改革は、あくまで学生の目線に立つて切り込まねばならない。今後仮に一律秋入学制が採用されるとしたら、本学は九月入学のほか、学生の学びの

選択幅の維持のため新たな意味をこめて四月入学制度も堅持するであろう。

もう一つ、学生の受講時間に匹敵する予習・復習の事実上の義務化と大学側のチェック義務化の問題であるが、中教審の時間の把握に深刻な疑問を持つ。あくまでこの答申の目的が学生の学びの力の向上にあるとするなら、一定時間の学びを義務づけて学力向上を図ろうとするこの提言は本末転倒も甚だしい論議である。本質は授業向上、学びの問題意識の向上にあるはずである。学生の学ぶ力が向上するのは、集中的考察時間、意欲を伴う情熱時間へ学生が没入することによる。形式的に課題向き合う時間を強要して質時間へ入っていくであろうか。五二号の巻頭言の繰り返しになるが、ミヒヤエル・エンデの『モモ』に登場する組織に属するセルスマンである「時間泥棒」も無心に遊ぶ子ども「時間」は奪えない。「時間泥棒」の天敵は「無心に感動し楽しむような時間の持ち方」なのである。大学に限らず、今私たち日本社会にとって大切なことは、私たちが真に「充実時間」を持ち直すことであって、政財界などに見え隠れする「時間泥棒」が供与する「形式時間」ではない。

では学生に「充実時間」を与えるためにはどうしたらよいか。それは、教授する側に研究・教育準備段階での「充実時間」が堪能されていることである。ここが問題の本質のほうである。ここがしっかり取り組まれると、「時間の量」の課題も含め、結果は後からついてくるのである。時宜をとらえた問題意識に満ちた講義、教員と学生とがともに真理を目指して、互いの面子を超え、心を聞き合つて、真に対話する授業（巷間評価の高いサンデル教授の授業にはこの点が弱い。受講生の意見を聞き取つて教授が少しも持論を変えないことのない対話は真の対話と言えるであろうか）の確立こそ急務であろう。ここから学生の密度の濃い予習復習が生まれ、「グローバル人材」も育つてくるのである。